

網走市西網走地区酪農の変化 (1978-1992年)

— 農場, 耕地, 乳牛, 乳量について —

井澤 敏郎 (吉田農場, 北海道平取町)

Survey on the change of dairy farming in the Nishiabashiri region of Abashiri city
(1978-1992)

Dairy farm, cultivated acrege, dairy cattle, milk producton
(Yoshida Farm, Birlatoricho, Toshiro IZAWA Hokkaido 055-03 Japan)

緒 言

1978年と1988年に筆者は、北海道網走市西網走地区において酪農調査を行った。^{1)・2)・3)} 本年1992年当地区で3度目の調査を行い、この15年間の変化を知ることができたので、以下その概況を記述する。

調査地の概況

調査地は能取湖岸に沿って酪農場が点在している。1978年初回調査時の酪農場は、45の個別農場と2つの農業生産法人の合せて47農場であった。1988年の2回目の調査時には、29の個別農場と2つの法人農場の合せて31農場となり、11年間で16農場減少していた。

結果および考察

1. 農場について

今回の調査では個別農場で10戸、34.5パーセント減少していた。個別経営の1農場が有限会社になったので、法人農場は3農場となり、個別、法人を合せて21農場となった。この15年間で55.3パーセント減少し、半分以下となった。その変化を見たのが表1である。

	1978年	1988年	1992年	増 減
個別農場	45	29	18	-27
法人農場	2	2	3	1
合 計	47	31	21	-26
1978年比%	100.0	66.0	44.7	-55.3

表1. 酪農場数の変化

1978年の出荷乳量の分布と、その後の酪農中止率を見たのが表2である。100トン以下であっ

出荷乳量 分 布	酪 農 經 営 戸 数			酪 農 中 止 率	
	1978年	1988年	1992年	中止戸数	中止率%
50kg以下	7	1	0	7	100.0
51-100kg	14	7	3	11	78.6
101-150kg	8	7	6	2	25.0
151-200kg	7	7	5	2	28.6
201kg以上	11	9	7	4	36.4
合 計	47	31	21	26	55.3

表2. 1978年の出荷乳量分布と酪農中止率

た農場の中止率が大変高いことが分かるが、それ以上の区分については大きな差はない。

今回の調査での10農場の酪農中止理由は、老齢、後継者なし、事故、病気などと、特に理由は片寄ってはいない。前回1988年の調査で、中止した16戸のうち、人手不足と後継者のいないことが半数になっていたのとは異なる点である。

これらのことから、1988年の調査では1979年からの牛乳の生産調整により、規模の小さな農場は経営が難しくなったことが根底にあったが、今回の調査では1989年から生産調整は大幅に緩和されているので、生産調整が経営中止の理由とは、直接にはなっていない。個々の農場の理由により酪農を中止したものと考えられる。

なお、前回調査の後より、フリーストール・ミルクングパーラー方式の牛舎の建設が始まり、1992年末までに6農場となっている。

2. 耕地と飼料作物について

この15年間の耕地面積の変化は表3に示され

作目 ha	1978年	1988年	1992年	増減	増減%
デントコーン	7.5	5.6	8.5	1.0	13.3
牧草	22.1	20.0	22.2	0.1	0.5
畑作	3.0	7.9	9.6	6.6	220.0
合計	32.6	33.5	40.3	7.7	23.9

表3. 耕地面積の変化 (21農場平均)

る。現在経営を続けている21農場全体で163ha増加しており、戸別面積は32.6haから40.4haへと7.7ha増加している。しかし、この中には法人に加入した2戸分が含まれているから、土地規模はそれほど増加していない。

作付はデントコーンは戸別平均で7.5haから8.5haへと1.0ha、13.3パーセント増加しているが、牧草は22.1haから22.2haへとほとんど変化していない。あとで述べる、1戸平均の出荷乳量が173パーセントも増加しているのに対して、飼料

作物の面積はわずかしか増えていない。

畑作は大きく増えているが、これは2つの法人によって大きく占められているので、牛乳の生産調整下で一時増加した畑作は現在は減少している。

デントコーンについて考察すると、面積の増加が少ないのは、収量調査で草量全体の反収はほとんど変化していないが、黄熟期の実取りの方向に進んできており、草量全体のエネルギー、栄養価としては向上していることが考えられる。

牧草について考察すると、面積はほとんど変わっていないが、15年前ごくわずかしか利用されていなかったグラスサイレージが、今回の調査で80パーセントで利用されている。これが牧草全体の利用率を高めていると考えられる。

機械利用組合による自走式フォーレージハーベスタの利用や、それに伴い大型のバンカーサイロが建設され、トラクターによる踏圧、乳酸菌の添加、早期密封などにより、良質のグラスサイレージが調整されている。また、5農場においてはデントコーンの作付を中止して牧草地とし、全量グラスサイレージに調整し、通年給与している。

牧草の草種はアルファルファが本格的に栽培され出しており、3分の2の農場で作付されているが、このことも、牧草の栄養収量を上げていると考えられる。

飼料の給与方法については、TMRによるミキシング給与が、フリーストールの6農場以外にも4農場で行われており、増加傾向にある。

3. 乳牛について

この15年間の乳牛飼養頭数の変化は表4に示される。経産牛頭数は21農場の平均で、1978年の33.6頭から1992年の54.8頭へと21.1頭、62.8パー

セント増加している。育成牛は21.0頭から46.2頭へと25.2頭、120.0パーセント増加している。全頭数では54.7頭から101.0頭へと46.3頭、84.6パーセント増加し、100頭の大台を超えている。

	1978年	1988年	1992年	増 減	増 減%
経産牛	33.6	34.2	54.8	21.1	62.8
育成牛	21.0	28.7	46.2	25.2	120.0
合 計	54.7	62.9	101.0	46.3	84.6

表4. 乳牛飼養頭数の変化 (21農場平均)

1988年調査では、経産牛は微増、育成牛は若干増加であったので、それ以後急速に増加している。1978年調査の時点では、酪農団地等の規模拡大が一段落した状況にあったことに加えて、1979年から始った牛乳の生産調整で頭数増が押えられていた。しかし、1989年からは生産調整が大幅に緩和されると同時に、フリーストール方式によって、当地区として第二次の規模拡大が始った。以後1992年までに6農場にフリーストールが建設され、飼養頭数の大幅な増加を生んでいる。

4. 乳量について

この15年間の乳量の変化は表5に示される。1戸当りの年間個体乳量は1977年が5,245 kg、1987年7,463 kg、1991年が8,696 kgと3,451 kg、65.8パーセント増加している。

1戸当りの出荷乳量は1977年が149トン、1987年が229トン、1991年が408トンと259トン、173.8パーセントの大幅な増加となっている。この大幅な増加は個体乳量の伸びも大きいですが、それ以上にフリーストール化とした農場の頭数増によっている。なお、当地区の最大出荷農場は1992年で1,400トンに達している。

	1977年	1987年	1991年	増 減	増 減%
個体乳量 kg	5,245	7,463	8,696	3,451	65.8
出荷乳量 t	149	229	408	259	173.8

表5. 個体乳量・出荷乳量の変化
(21農場平均)

乳価は1977年がkg当り約88円であったが、以後生産調整の下で下落し、1987年は約82円、1992年は約76円と下り続けている。

これらのことから、1978年から1988年の間は生産調整下ではあったが、16戸の酪農中止農場の分を地域枠の中で振り向けて残った農場が増産し、1989年の生産調整の大幅な緩和後は、フリーストール牛舎建設による生産増が、10戸の中止農場の分を埋めてもなお大幅な増加となっていると考えられる。

概 要

1978年、1988年、1992年と3度にわたり、網走市西網走地区で酪農調査を行った。

その結果この15年間で

- (1) 農場数は47農場から21農場へと26農場、55.3パーセント減少し半数以下になった。
- (2) 耕地は現在経営している21農場平均の面積は7.7 ha増加しているが、牧草は変化なく、デントコーンは1.0 ha増加し、畑作は6.6 ha増加している。グラスサイレージ利用の増加とアルファルファの作付が増加している。
- (3) 乳牛使用頭数は平均で54.7頭から101頭へと46.3頭増加している。
- (4) 乳量は年間個体乳量で8,696 kg、年間出荷乳量で408トンになっている。

文 献

- 1) 井澤 敏郎・篠原 功・原田 勇
(1979)、乳牛起立不能症の原因解明のための調査研究、畜産の研究、vol. 33-11, 12。
- 2) 井澤 敏郎・篠原 功・原田 勇、
(1980)、乳牛起立不能症の原因解明のための調査研究、北海道草地研究会報、vol. 14。
- 3) 井澤 敏郎、(1989)、網走市西網走地区酪農の変化(1978-1988年)、北海道草地研究会報、vol. 23。